図書だより　ライブラリーニュース

Library News

平成 29（2017）年 12 月
府中市立府中第八中学校
図書室担当　粟谷千衣子

今年もあと少しになりました。みなさんにとってどんな一年でしたか。良い本との出会いはありましたか。英国人作家でノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロさんは記念講演のなかで、「この危険な分断の時代に私たちはさまざまな声に耳を傾ける必要がある。良い文学と良い読書には壁を取り払う力がある」とおっしゃいました。この言葉を聞き、さまざまなテーマの本を読み、異なるの立場の人々のことも考えることができる心を養いたいと思いました。

冬の日

室生犀星

晴れた冬の日は清浄だ
立ち木はきれいに裸になり
骨だけになって立っている
水たまりに映っている
澄み透っている
冬の始まりかける頃は
みな静寂にこもると見える
からりと晴れたなかに
一つの濁った音すらしない
みなよく透（すきとお）って朝のように新しい

11 月の図書室　（開館日数 17 日）

入館者数 943 人　（1 日平均 55 人）

	男子	女子	合計
1 年生	141	214	355
2 年生	129	314	443
3 年生	51	97	148

貸し出し冊数 496 冊

学年毎の上位クラス

1-C　26	2-B　85	3-A　26
1-F　25	2-F　55	3-D　15
1-D　24	2-E　52	3-B　14

冬休みの特別貸し出しについて

12 月 18 日より　　ひとり５冊まで　本の旅人（ブックトリッパー）は８冊まで

最終返却日は１月 19 日　（図書室は 10 日より開館予定）

注意　返却期限を過ぎた本を持っている人は利用できません。

期限が過ぎた本はきちんと返却して利用しましょう！

本の福袋

今年も冬休み特別貸し出し期間中に**本の福袋**を用意しました。ノンフィクション、日本文学、海外文学をそれぞれ 10 冊選びました。文学は袋の表に分類と「おもしろい」「怖い」「泣ける」などがわかるよう印が入れてあります。ノンフィクションには、テーマを記しています。ぜひご利用ください。

12 月のこよみから　　12 月３日から９日まで障害者週間

障害者週間は「国民の間に広く障害者の福祉についての関心と理解を深めるとともに、障害者が社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に積極的に参加する意欲を高めることを目的として」2004 年障害者基本法の改正により設定されました。

『僕はホルンを足で吹く』フェリックス・クリーザー著　ヤマハミュージックメディア　289/ク

副題は、「両腕のないホルン奏者 フェリックス・クリーザー自伝」。いま最も注目されるホルン奏者のひとりである彼は「問題を解決するときは他人をあてにするのではなく、自分で処理する」ことを原則にしているといいます。彼は本の中で、生い立ちは語っていますが、腕がないことは特に語っおらず、写真もありません。演奏家としての日々や自身の哲学、音楽との向き合い方が綴られています。今回、障害者週間の本として紹介していますが、むしろ素敵な音楽家の本です。ぜひ読んでください。

12 月生まれの作家たち

１日　藤子Ｆ不二雄(1951)	10 日　寺山修司(1935)	17 日　島木赤彦(1876)	24 日　小野不由美(1960)
３日　永井荷風(1879)	13 日　田山花袋(1871)	21 日　松本清張(1909)	26 日　菊池寛(1888)
３日　種田山頭火(1882)	13 日　浅田次郎(1951)	23 日　ファーブル(1823)	28 日　ツルゲーネフ(1818)
４日　リルケ(1875)	15 日　いわさきちひろ(1918)	23 日　宮部みゆき(1960)	28 日　堀辰雄(1904)
７日　与謝野晶子(1878)	15 日　谷川俊太郎(1931)	23 日　綾辻行人(1960)	30 日　開高健(1930)
９日　ミルトン(1608)	16 日　尾崎紅葉(1867)	24 日　阿川弘之(1920)	31 日　林芙美子(1903)

「である」調の言文一致体完成者　尾崎紅葉　(1867～1903)

尾崎紅葉は慶応３年（新暦 1868 年 1 月 10 日）東京 芝に生まれた。本名は徳太郎。大学予備門（旧制一高の前身）の学生であった明治１８年に山田美妙(びみょう)らと日本最初ともいわれる文学結社・硯友社(けんゆうしゃ)を結成し、機関紙「我楽多文庫(がらくたぶんこ)」を創刊した。この時代の文学は欧化主義への反動から国粋主義運動へ、それも江戸文学、特に井原西鶴にもとめようとする気運が生じていた。ユーモアを好んだ紅葉は、江戸末期の戯作文学(江戸時代後期の娯楽小説類の総称) に学び、古典を見直し、西鶴の写実的な手法に影響され、伝統的な雅文と俗な言葉や口語が混じった雅俗折衷体(がぞくせっちゅうたい)と呼ばれる文体による小説を発表し人気を博した。文壇の中心的存在となった紅葉のもとには、泉鏡花や田山花袋、徳田秋声らが集まった。そして同時期に活躍した幸田露伴とともに「紅露の時代」と呼ばれる一時期を形成した。また、美妙による「です」調の言文一致（話し言葉“言”と書き言葉“文”を一致させた近代的口語文体）の提示に刺激を受けた紅葉は新文体を目指し、1896 年『多情多恨(たじょうたこん)』を書き、「である」調を完成させた。翌年には大作『金色夜叉(こんじきやしゃ)』の連載を始めるが、健康を害し、胃がんのため３５歳で没した。このため『金色夜叉』は明治最大の人気を博すが、未完に終わった。

3年生が家庭科で行った保育園の子どもたちとふれ合う授業のお手伝いをしました。

今年度も図書室では、３年生の家庭科の家族・家庭と子どもの成長という授業で使用する絵本を準備するなどのお手伝いをしました。３年生のみなさん、保育園に行って、小さな子どもたちとふれ合う体験はいかがでしたか？

赤ちゃんに出会える図書室の本

『君が夏を走らせる』

瀬尾 まいこ 著　新潮社　913/セ

主人公は『あと少し、もう少し』に登場していた不良少年・太田。高校生になったが、打ち込むものが見つからない彼は、金髪にピアスで、ふらふらしていた。そんな彼が、夏休みに先輩の子どもで一歳十か月の女の子の世話を頼まれ…。『あと少し、もう少し』は３年生の八中課題図書です

『みんなあかちゃんだった』

鈴木 まもる 著　小峰書店　E

作者が、自身の子育て日記をもとに作った、生後間もなくから２，３歳までの赤ちゃんの成長を描いた本です。思わず笑ってしまうかわいいしぐさの赤ちゃんが、紙面いっぱいに描かれ、絵本ですが、読み応えがあります。

来て！みて！よんで!!

新着本の中からご紹介…

『ど田舎うまれ、ポケモン GO をつくる』

野村 達雄 著　小学館集英社プロダクション　589/ノ

昨年リリースされた人気のゲームアプリ・ポケモン GO。先月も鳥取砂丘でイベントが行われ、たくさんの人々が、スマホ片手に砂丘を歩き回ったという報道がありました。さて、この本は、そのポケモン GO の開発者である野村達雄さんの驚きの半生が書かれています。彼のおばあさんは満蒙開拓移民として満州に渡り、戦後は中国残留邦人となり苦労された方で、彼自身は中国の寒村で生まれ、小学生の時に日本に移住しました。生活は大変で、ゲーム機やゲームソフトは買えず、友だちの家でゲームを楽しんでいたそうです。そして中学生になり、新聞配達をして貯めたお金でパソコンを買うとプログラミングに興味を持つようになり…。「僕は迷ったときにはなるべくチャレンジングな選択肢を選ぶようにしてきた」という野村さんの生き方が書かれたこの本を読むと、勇気がわいてきます。

本を読んで、知らない世界を旅しよう！

教科書で紹介の沢木耕太郎著『深夜特急』や近藤雄生著『旅に出よう』もどうぞ。

『医者のたまご、世界を転がる。』

中島 侑子 著　ポプラ社　290/ナ

現在、救命救急医の著者は、医学部卒業を控え、自分の知らない世界をたくさん残したまま医者になることに疑問を感じ、研修医を終えると、３年間５２か国を巡る旅に出た。摩訶不思議な医療行為を経験したり、無医村やスラム街で働いたり…。

『インパラの朝』

中村 安希 著　集英社　292/ナ

ノンフィクション作家の中村安希さんは「小さな声にそっと耳を傾けること。それこそがコミュニケーションの核だ」という先生の言葉が動機となり、26 歳の時旅に出た。684 日かけてユーラシア大陸とアフリカ大陸を巡った。これは彼女が見聞きした記録。

『給食のおばさん、ブータンへ行く！』

平澤 さえ子 著　飛鳥新社　292/ヒ

給食調理員の平澤さえ子さんは、ブータンに行き、すっかりブータンの魅力にとりつかれていました。そんなところに「ブータンで給食の改善をしてみない？」といううれしいオファーが。勇んで現地へ向かうが、そこで待っていたものは…。

『渋谷ギャル店員　ひとりではじめたアフリカボランティア』

栗山 さやか 著　金の星社　916/ク

渋谷 109 のギャル店員だった栗山さやかさんは、親友を癌で亡くし、哀しみのなかでバックパッカーとして旅に出ることを決意。長くても２年と思って旅に出たのですが、アフリカの現状を目の当たりにして…。

冬休みに読みたい冬の物語

『季節風　冬』

重松 清 著　文藝春秋　913/シ

５月号で小坂先生が紹介してくださったシリーズの中から冬の物語。焼き芋が出てくる物語から大学入試の合格発表の日の物語まで、１２編が収録されています。外は寒くても読むと心は温かくなります。

『ペチカはぼうぼう猫はまんまる』

やえがし なおこ 著　ポプラ社　913/ヤ

「ペチカはぼうぼう　猫はまんまる　おなべの豆はぱちんとはじけた」こんな楽しいことばが聞こえてきたら、お話が始まります。五つのふしぎな物語を読んでいると、猫と一緒にペチカの前にいるようです。

今年も図書室を利用していただきありがとうございました。良いお年をお迎えください。